

NICU長期入院例の実態調査

(分担研究：地域周産医療システムの評価に関する研究)

研究協力者：千葉 力

要約：NICUにおける長期入院例の実態調査を全国で27のNICUの集計を行った。本研究では出生体重と入院期間により分類して検討した。出生体重については、1,500g未満、1,500g以上2,500g未満、2,500g以上の3群に分けた。入院期間については日齢90以上、150日以上入院例を集計した。さらに各体重群とも出生予定日からの入院期間別による、1993年における全国の入院例を集計した。調査結果は、日齢90以上入院例は3,431例、日齢150以上入院例は1,284例と推定された。このうち出生体重1,500g未満児の占める割合が多かった。しかし各年齢群を出生予定日からの修正日齢による入院期間を見ると、日齢90以上入院例の内では修正日齢150以上では、出生体重1,500g未満は7%、1,500g以上2,500g未満は34%、2,500g以上は43%入院していると推定された。

見出し語：長期入院例、出生体重、生後日齢、修正日齢

緒言：近年の新生児医療の進歩により、NICUにおいては重症児収容数の増加により、重症児の延入院数が増加している。その結果NICUが満床による周産期センター産科の入院数を制限せざるをえない状況にある。それゆえ重症児によるNICUの長期入院例の実態調査を行った。

研究方法：1)調査対象：日齢0～6の早期新生児期に入院した新生児のうち、継続して医療施設に日齢90以上入院した例 2)NICU長期入院例：日齢150以上入院した例 3)調査期間：1993.1.1～1993.12.31に入院した例 4)調査施設：全国のNICUの中で調査期間の1年間に人工換気施行40例以上の施設の中から、任意の27施設 5)調査方法：アンケート方式

調査結果：1)NICU長期入院例の出生体重群別の例数と割合(表1)

①1993年における調査施設に入院した極小未熟児(出生体重1,500g未満児)の総数1,480例 ②1992年における日本全国の極小未熟児の出生総数6,798例 ③1993年も全国の極小未熟児出生数が1992年と同数とすれば、調査施設の極小未熟児の総数は全国の21.8%に相当する。④日齢150以上入院例においては、極小未熟児が76.1%、出生体重1,500g以上2,500g未満児が11.8%、出生体重2,500g以上児が12.1%を占める。

表1. 全国の27施設におけるNICU長期入院例の出生体重群別の例数と割合

出生体重 (BW) <g>	出生からの入院期間	
	90日以上	150日以上
BW<1500 <100%>	801 (80.3%) <100%>	213 (76.1%) <35.4%>
1500≤BW<2500 <100%>	73 (9.8%) <100%>	33 (11.8%) <45.2%>
2500≤BW <100%>	74 (9.9%) <100%>	34 (12.1%) <45.9%>
計	748 (100%) <100%>	280 (100%) <37.4%>

2) 1993年における全国のNICU長期入院例の推定例数(表2)

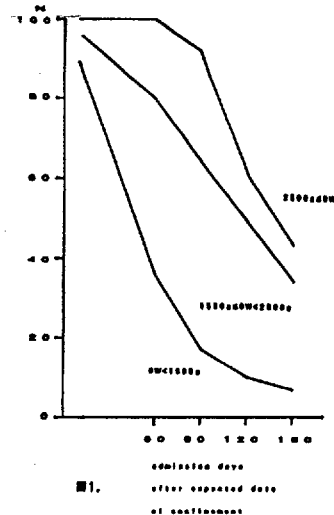
表2. 1993年における全国のNICU長期入院例の推定例数

出生体重 (BW) <g>	出生からの入院期間	
	90日以上	150日以上
BW<1500	2757	977
1500≤BW<2500	335	151
2500≤BW	339	156
計	3431	1284

⑤極小未熟児と他の出生体重群との例数の割合が1992年と1993年で同じとみなすと、日齢90以上入院例は3,431例、日齢150以上入院例は1,284例となる。⑥1992年の全国の出生数は1,208,989例であるから、1993年も同数とすると、対出生数比では、日齢90以上入院例は0.28%になり、日齢150以上入院例は0.11%になる。⑦昭和62(1987)年度、厚生省心身障害研究、周産期医療をめぐる諸問題に関する研究、『新生児救急医療システムに関する研究』(分担研究者、小川雄之亮)によれば、3カ月以上連続して入院治療を必要とした例は全国の対出生比で0.27%と想定された。

3) NICU長期入院例の各出生体重群における出生予定日からの入院期間の比率(図1)

①日齢90以上入院例を3つの体重群に分けて出生予定日からの入院期間により、例数の減少比率を示した。②極小未熟児においては出生予定日からの修正日齢による入院期間は、他の群に比して、修正日齢60までの退院例が非常に多く、入院例は36%にまで減少している。その後、修正日齢150までは入院例は7%にまで減少している。③修正日齢150では、出生体重1,500g以上2,500g未満は34%、出生体重2,500g以上は43%入院している。



4) 調査した27施設の人工換気病床の総数は268床である。修正日齢150以上入院の280例は人工換気病床の104%になる。

考察：以上の結果より全国の対出生数比では、日齢90以上入院例は0.28%(3,431例)になり、日齢150以上入院例は0.11%(1,284例)になる。日齢150以上入院例の内では出生体重1,500g未満の例は76.1%を占める。しかし修正日齢150では、出生体重1,500g未満の例では、日齢90以上入院例の7%しか入院していない。すなわち出生体重1,500g未満の例は比較的前後が良いといえる。

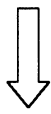
結論：NICUの機能を十分に活用するためには、後方ベットを確保する必要がある。特に出生体重1,500g以上児について必要である。

参考文献：

1) 小川雄之亮：新生児救急医療システムに関する研究、厚生省心身障害研究、周産期医療をめぐる諸問題に関する研究、昭和62年度研究報告書P 47-49、1988



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：NICUにおける長期入院例の実旗調査を全国で27のNICUの集計を行った。本研究では出生体重と入院期間により分類して検討した。出生体重については、1,500g未満、1,500g以上2,500g未満、2,500g以上の3群に分けた。入院期間については日齢90以上、150以上入院例を集計した。さらに各体重群とも出生予定日からの入院期間別による、1993年における全国の入院数を推定した。調査結果は、日齢90以上入院例は3,431例、日齢150以上入院例は1,284例と推定された。このうち出生体重1,500g未満児の占める割合が多かった。しかし各年齢群を出生予定日からの修正日齢による入院期間を見ると、日齢90以上入院例の内では修正日齢150以上では、出生体重1,500g未満は7%、1,500g以上2,500g未満は34%、2,500g以上は43%入院していると推定された。